

愛大地域おこし協力隊

## 「環境と観光と漁業の島おこし 日間賀島の挑戦に学ぶ」

(現地訪問日：2013年9月3日)

### 日間賀島を訪ねて

「多幸と福の島、日間賀島。」ここ数年、このようなキャッチコピーを耳にした人もいるのではないか。気軽にタコやフグを食べられる島をアピールし観光客数を増やしたい日間賀島のイメージ広告だ。日間賀島は愛知知多半島の南端、師崎港の東3キロに位置し、周囲5.5km、面積0.77km<sup>2</sup>、総人口2,051人(平成25年国政調査)の小さな島で、南知多町に属している。その日間賀島に、私たちは島の漁業の現状や島おこしの仕組みを学ぶために訪れた。

日間賀島へは名鉄河和線終着駅の河和駅から車で師崎港まで行き、そこから海上タクシーに乗るルートをとった。河和駅から師崎港まで車に乗せてくださったのは、日間賀島で生まれ、日間賀島で漁師をしている清水光人さんだ。今日1日日間賀島を案内して下さるそうだ。

知多半島の先端から10分ほど海上タクシーで走り、日間賀島に到着した。私たちを迎えていたのは一面の青空と地平線に浮かぶ真っ白な入道雲、そして真っ赤な太陽が藍色の海に反射して黄金色に輝く光景だった。学習目的で訪れた私たちであったが、島や海の美しさでしばしばカンス気分になってしまった。

私たちは日間賀島漁業協同組合に案内された。ここで清水さんへのヒアリングを予定していたが、お昼の時間が近かったので先に昼食と島めぐりをする事になり、清水さんの案内で島の定食屋に向かった。



### 若者に人気の周遊

移動中の車窓からバーベキューが楽しめる海水浴場が見え、そこは名古屋市内の大学から来た学生たちで賑わっていた。海の暮らしを体験するインターンシップだという。店に到着し店内に入ると、そこも大学生や観光客でいっぱいだった。どうやら日間賀島は若者たちにも人気が高いそうだ。

私たちは日間賀の海の幸を堪能することにし、私はタコのぶつ切りを食べた。とれたての日間賀タコは甘味がありとてもおいしかった。なるほど、こんなに旨いタコが気軽に食べられれば観

光客も訪れるはずだ。

店を後にして、私たちは伊勢湾を見渡せる浜辺の海水浴場へ向かった。なんとその海水浴場では5月から9月中旬までイルカが飼育されているのだ。そこで私たちは、イルカの世話をしている飼育員の岡田さんに日間賀島とイルカについての説明を受けた。

驚くことに日間賀のイルカは元々、観光や島おこしのために連れてきたのではないという。当初は、南知多ビーチランドで飼育しているイルカを一時的に自然の中で育てることによってイルカのストレスを減らす環境エンリッチメントという取り組みによって、たまたま日間賀に連れてこられたのだ。

しかしイルカは観光客の受けが良く、次第にイルカ目的の観光客が増えた。その結果、島おこしにも貢献する島の大切な観光資源になったという訳だ。清水さんは、「イルカによって観光客が増えたのは間違いない。観光客が増えればその分日間賀は活性化する。イルカに関することで我々漁師たちが手伝えることがあればどんどん手伝っていきたい」と述べた。飼育員の岡田さんも「実際、イルカの管理に関しては漁師さんや地元の観光関係者にだいぶ助けられている。漁師さんや地元の方がいないと経営も成り立たない」と述べていた。

島おこしは外部からの力だけでなく、島民が必要性を自覚しそれを支えることができなければ成功しないのだろう。日間賀島のイルカ事業は外部と内部の相互関係がうまく釣り合っていて、島おこしが成功している事例の一つと言える。

次に私たちが向かったのは日間賀島資料館。移動中に私たちはサイクリングをしている女子大生のグループを見かけた。日間賀島は自転車を観光客に貸し出していて、島を自由に廻れるようになっている。貸自転車によって観光客の移動の利便性が向上し、効率よく島を観光することが可能だ。そして観光客はさらに深く島を味わえる仕組みとなっている。日間賀島は貸自転車で観光の幅を広げているのだ。

資料館に到着し、私たちは日間賀島の漁の歴史や漁法を学んだ。やはりタコに関する資料が多く、日間賀島とタコの関係の濃さが伺えた。観光客に漁の歴史や漁法を知ってもらい、日間賀島に対する関心を上げる狙いだらう。



**タコは多幸、フグは福、縁起の良い日間賀島**

一通りの島めぐりはここで終了し、私たち車で漁協へ戻り清水さんへの質疑応答を開始した。

私は清水さんに日間賀島ではいつ頃からタコとフグが観光の材料となったのか質問した。清水さんは「タコはおよそ30年前からだね。日間賀島伝説にある、寺の本尊が津波に流されて、オオダコに抱かれて蛸壺から発見された蛸阿弥陀っていう昔話と一緒に日間賀タコを売り出したんだ。タコも多幸という漢字を当ててね。そこから定着しましたよ。でもタコの期間は春から夏にかけてしかない。冬の間はこれといった物が無かった。そこで冬が旬のフグに目を付けたんです。日間賀島はもともと、良質のフグが取れるため、江戸時代からフグ漁が盛んに行われてきた地域だね。本格的にフグを売り出し始めたのは20年くらい前かな。フグは福という漢字にしました。」と答えた。

島に観光客を呼び続けるには一年中、魅力をアピールできるモノが必要ということだ。そしてそれは、ありきたりなモノでなく、その島に特化したモノでなければならない。他の観光地との差別化が必要なのだ。日間賀島では春から夏にかけてタコ、5月から9月中旬までイルカ、そして冬にはフグという形をとっていて、一年中観光客を飽きさせない工夫をしている。

そしてもう一つ大切なことは島のイメージ戦略だ。いくら良い観光資源があってもそれが観光客の頭に残りにくいイメージであれば、客足は伸び悩むだろう。日間賀島ではタコを多幸、フグを福とし、縁起の良さを観光客にアピールして日間賀の良いイメージをつくっている。このような日間賀島の観光戦略が功を奏し、10代後半から20代といった若者世代に人気が高まっているのだ。



### 海の環境と資源の再生をめざす

さらに、私たちは清水さんから島に関することや、漁業の現状について多くのことを学んだ。実際に生の声を聞いてみると正確な島の情報が聞けて、私たちの調査に具体性を持たせることができた。

今回、清水さんは、私たちのために素晴らしいプレゼントを用意してくれていた。それは島の漁業体験であった。今回私たちが体験したのは、あさりの稚貝の放流だ。まず、漁港に集合し漁師さんたちと顔合わせをした。そこで私たちは、意外にも若い漁師さんが多いことに驚かされた。一人の漁師さんに年齢を尋ねてみると18歳と答えた。高校を卒業して漁師になったという。気

のせいか私たちよりも大人びて見えた。他の漁師さんたちも若く、恰幅が良い。まさに海の男という感じだった。

放流作業は船に稚貝を積み込むことから始まる。私たちは最初、漁師さんたちが網袋に詰められた稚貝を手際よく且つ軽やかに積み込む姿を見学していた。途中から私たちも手伝ってみたが、稚貝の網袋が意外にも重く、網状の袋が指に食い込む。情けないことに短時間の積み込み作業だけで疲弊してしまった。稚貝の網袋は一袋 20 キロだという。それを漁師さんたちは片手で軽々しく持ち上げているのだ。海の男のたくましさに憧れを抱くほどだった。

積み込みの後は小型漁船に分乗し、少人数に分かれて放流を行う。放流は網袋を解いてそのまま海に稚貝を放流するだけだ。作業中、自分が放流した稚貝が海でたくましく成長していく姿を想像し、楽しくなってきたのを覚えている。稚貝を撒き終え、これで一通りの放流作業は終わり私たちは港に戻った。この稚貝は、豊橋市を流れ三河湾に注ぐ豊川の河口に広がる天然の干潟「六条潟」で自然発生するものだという。六条潟は日本有数の稚貝の自生地で、良質なアサリの稚貝を愛知県内の漁協をはじめ全国に出荷しているという。アサリは食料でもあるが、海を浄化してくれる「海の濾過機」でもあるという。海に稚貝を播くことは、漁業資源を育てることと併せて、三河湾を浄化し、観光客が海に親しめる環境を再生することにもつながることを、清水さんから教えていただいた。

実際に海へ出てみて、漁師という仕事が、漁業を通じて食料を生産し、かつ観光資源を再生し、タコやフグが生存する海洋環境を保全するといった何重にも意義を持つ重要な地域産業であることが理解できた気がする。そして、その重要さを身をもって体験することができた 1 日だった。このような経験を通じて、漁師に対する畏敬の気持ちも自然と湧いてきた。



#### 和みの夕暮れ、さらなる挑戦へ

漁業体験の後は、日間賀島のホテルの浴場に浸かった。浴場はホテルの上層階に位置していたため知多半島を一望でき、半日の疲れを癒すのには十分すぎるほどであった。

そして私たちは浴場を後にし、清水さんの案内で島の名物とまで言われる定食屋で晩御飯を食べることにし、私はエビカツカレーを注文した。日間賀島で捕れた新鮮なプリプリのエビがカレーとよく合い、スプーンが進む。気が付くとお皿の上には何も残っていなかった。観光客にこう

した鮮度の高い食材を提供できるのは、店と漁師との間で円滑なコミュニティが形成されているからであろう。

日間賀島を堪能し、これで今回の活動は終了した。帰りの海上タクシーから日間賀島がだんだん小さくなっていくのが見え、もう少し日間賀島にいたいという気持ちが大きくなってきた。学習目的で訪れた私たちがこのように思うのなら、観光目的で訪れた観光客はさらにその気持ちが強いのは明白だ。おいしい食事と風光明媚な海辺は、大都市・名古屋から少し足を延ばすだけで満喫できるのだ。日間賀島に若者が訪れるのも納得できる。たった半日の滞在だったが、漁業体験を通じて得たものも大きかった。今回学んだことをベースにして、次回は私たち学生の手で取り組める島おこし活動には何があるかを貪欲に探してみたい。島の人々や自然が好きになりだした私たちにとって、島おこしのための地域貢献の旅は、これからが本番だ。良い面ばかりでなく、島の生活課題や防災など様々な問題も学びつつ、愛大生にできること、愛大生だからすべきことを、真剣に考え行動していきたいと考えている。

